

気管切開児の退院移行支援・地域連携の推進 —医療的ケア技術修得のためのモデル教材の開発と活用—

渡邊 理恵 ●久留米大学 医学部 看護学科 講師



要旨

小児の医療的ケアの中でも、特に生命の維持に直接関わる気管切開の管理は、技術の修得が大きなハードルとなっている。しかし、様々な事業所や教育機関などで活用できる気管切開の管理・ケアに関する技術修得を行うための小児の教材はない。これまでペットボトルやぬいぐるみなど手づくりの教材が活用されていた(写真1)。そこで、気管切開のある小児に関わる多職種に対して技術修得の現状と課題についてインタビューを行った。その結果、まず1点は、気管カニューレと気管・気管支の位置や、吸引チューブが体内でどの位置まで挿入されているのか確認できず、注意点などの根拠を理解しにくいということ。さらに2点目は、練習する教材がなく、実際の子どもで練習をせざるをえない状況から過度な不安や申し訳なさを感じているということであった。

そこで、モデル人形の開発は、可視化により技術習得を直接確認しながら行えること。また練習を繰り返すことを可能とした(写真2)。さらに共通の教材を活用することで、気管切開のある子どもに関わる医療職・非医療職の相互に課題の共有が生まれ、連携が促進されることを目指す。今後このモデル人形の有効性の検証が課題となる。

1. 背景と目的

現在、低出生体重児の増加、周産期医療の進歩により地域で暮らす医療的ケア児は、約1.9万人と推計され、約10年間で2倍に増加している。

医療的ケア児とは、①気管切開がある ②痰の吸引が欠かせない ③人工呼吸器を付けている ④在宅酸素療法を受けている ⑤胃や腸などから経管栄養を受けている等の状態の児童である。増加する医療的ケア児に対して、国は児童福祉法の一部を改正し、地方公共団体に医療的ケア児が各分野から適切なケアを受けられる体制整備を求めている。つまり、医療的ケアの修得が家族だけでなく、福祉・保育・教育等の児に関わる様々な分野の人々に求められている。

医療的ケアの中でも、特に生命の維持に直接関わる気管切開の管理は、技術の修得が大きなハードルとなっている。しかし、様々な事業所や教育機関などで活用できる気管切開の管理・ケアを修得するための教材はない。そこで、対象児に関わる多職種に対してケアの技術修得についてインタビューを行い、明らかとなった現状と課題を参考にモデル人形を開発した。この教材の利用により、様々な職種が技術の修得だけでなく、ケアに対する具体的な課題の共有を可能とすることで連携が促進されることを目的とする。

2. 活動の方法

1) インタビュー調査

家族・退院指導担当看護師・訪問看護師・訪問介護士・相談支援専門員・療育施設の看護師の28名にインタビューを実施。

2) 小児の気管切開ケアモデル人形の開発

①1) の調査結果に基づいたケアモデル人形の

企画書を医療・看護教育用教材制作会社Aに提案。

- ②Aの技術担当者と構造・機能・素材・重量などの打ち合わせを重ね完成させた。

3.現状の成果・考察

1) 小児の気管切開の管理・ケア技術修得の現状と課題

結果1：家族

- ①子どもの病気の受け入れと、医療処置の習得の難しさによる精神的ストレスが大きい。
- ②①のため退院がなかなかできない。
- ③指導を受けた後、練習はできずいきなりわが子で行うことに不安や申し訳なさを感じている。
- ④母親(中心の一人)のみが背負う傾向となる。

結果2：病院の医師・看護師(送り手)

- ①気管切開について手づくりの教材を活用しながら指導を行っているかが、不十分さを感じている。
- ②気管切開部のケアや吸引の方法の根拠を伝えるににくい。
- ③練習を直接わが子でさせることの支援の難しさを感じている。

結果3：訪問看護師(迎え手)

- ①小児科の経験のある看護師が少ない。
- ②気管切開の管理で成人と小児の違いを十分理解している看護師がほとんどいない。
- ③経験のなさから受け入れに不安があり依頼を断る。
- ④受け入れを目指して理解や技術習得を行う研修会や利用できる教材がない。

結果4：相談支援専門員

- ①気管切開のある小児の支援計画の依頼が増加しているが、気管切開について見たことが



写真1 日用品を用いた手づくり教材



写真2 開発した「小児気管切開ケアモデル」

なく、知識がない相談員が多く、支援計画を立てにくい。

- ②サービスをつなぎたいが、支援をしてくれる訪問看護ステーションが少ない。

結果5：訪問看護師

- ①基礎研修を受けて実地試験(研修)までは各自の努力に委ねられている。
- ②手技の方法は理解しているが根拠は理解しにくい。
- ③練習を繰り返しできず直接子どもに実施することに大きな不安を抱えている。

2)「小児気管切開ケアモデル人形」の開発

可視化により技術習得を直接確認しながら行え、繰り返し練習することを可能とした。さらに軽量で携帯性を確保し、地域の多職種が直接手に触れ、実践的な課題を共有できることを狙いとして写真2のような「小児気管切開ケアモデル人形」を開発した。

4.今後の展望

今後は、開発したケアモデル人形の有効性の検証が必要である。このケアモデル人形の活用により、インタビューで得られたそれぞれの立場の課題がどのように解決され、技術習得をした人材の量と質の確保が促進されたのか、それにより地域の多職種に支えられながら、家族と共に成長しながら暮らしていける気管切開のある児が増えることを目指す。